

論文

北海道の住生活についての体験記述に関する考察

～ 冬の暮らしの可能性と課題 ～

田中宏実*

1. はじめに

1-1 背景と目的

北海道の住まいにおいて、寒さ対策や雪処理は切実な課題である。しかし近年著しく技術開発がなされ、「北方型住宅」¹⁾が誕生し、現在、冬の住生活は数字的、技術的にはとても快適なものになったことがわかる。しかし住まい手自身はこの変化をどのように捉えているのであろうか。冬の住生活を経験する中で、ネガティブに考えがちな雪や寒さの問題を住まい手はポジティブなものへと変えていくことはできたのであろうか。

「住まい」は居住者を守り育むベースとなる場であるのと同時に、住まいに対する経験や関わりを通じて、住まい手自身を成長させる場でもあると考える。そのような視点から考えた場合、技術の発達とともに、住まい手は寒さや雪をポジティブなものに変えていくことはできたのであろうか。現在の北海道の住宅技術の進歩とともに、住まい手はどのように成長したのであろうか。

以上のことから、本研究では北海道の住生活の向上の様相と住まい手自身の成長の実態を把握し、今後の住生活への課題を見出すことを目的とする。

1-2 調査概要

本論では、北海道の住まいにおける住生活の様相と、住まい手と空間の対応関係を明らかにする方法として「住まいの体験記述」²⁾を用いて検討する。「住まいの体験記述」とは住まい手自身の居住体験を記録する方法であり、すでに確立されている住まい方調査において把握しきれない部分、例えば住まい手の成長に応じた住空間との関係の変遷や、住み手がその時々感じたことなどを映し出すことができる方法として有用である。

本論では、2005年11月に藤女子大学生を対象としておこなった「住まいの体験記述のレポート」を用いて検討をおこなう。課題では、生まれてから現在(2005年)まで(0歳～20、21歳頃)の学生自身が住んだ住居の変遷(住居形態、住んだ年、住んだ場所)と、それぞれの住まいでの記憶に残る体験、エピソードとそこで感じたこと、その時の住空間の状況について記すことを条件とした。

また、本論文では体験記述に書かれた内容の中でも、「冬の住生活」に関する

* 藤女子大学人間生活学部人間生活学科 講師

冬の住生活に着目した体験記述について検討することとした。回答者は住環境論受講者の2年生61人である。そのうち冬の住生活についての体験記述を描いていたのが39人いた。本研究ではこの39人を研究対象者とする。回答は複数回答で、回答数は69あった。

2. 学生の体験記述に見る考察

学生の記述から見られたものはA～Gまで傾向を分類することができる(表1)。それぞれの分類項目に関する体験記述(表2)を検討する。

表1 「冬の住生活」に関する体験記述の分類

A: つらさ・くるしさとしての冬	24(35%)
B: 技術革新による快適性の確保	15(22%)
C: 寒さを利用する	1(1%)
D: 寒さ対策	7(10%)
E: 原風景、感受性を刺激する体験	9(13%)
F: 子どもの遊び場	10(15%)
G: 本州との違い	3(4%)
計	69(100%)

2-1 全体の傾向

冬の住生活についての体験記述における住まいの場所(表2)は、札幌37、札幌以外28、不明4ケースあり、札幌が最も多い。住居形態(住形態)(表2)に関しては、戸建44、アパート10、マンション7、官舎・社宅4、寮3、不明1ケース、である。体験時の回答者の年齢に関しては漠然と記しているものが多いが、10歳以下(1980年代中ごろ～1990年代前半)から住んでいる家について書いているものが比較的多い。

2-2 雪・寒さの問題とつらさ

A: つらさ・くるしさとしての冬

冬の生活についての「不便さ」「寒さ」に関しての記述が全体的に最も多かった(表1)。その中身を見てみると寒気、凍結、除雪、隣家とのトラブル、があった。以下に代表的なものを記述する。

寒気: 暖房をつけても寒気が入ってきて家にいても寒い(表2-[11])

凍結: トイレの便器の中も凍ってしまうぐらい外気が入ってくる(表2-[21])

除雪: 冬に雪が降るとこまめに除雪しなければならない(表2-[17])

隣家とのトラブル: 近所の人たちは我が家の北側に雪を積んでいて困った。また屋根の雪に対する苦情(表2-[22]、[25])

表2 冬の住生活に関する体験記述の内容

回答者	回答番号	記述内容	体験年齢	場所	住形態	分類
2	[1]	冬の寒さの厳しい帯広、マイナスの日、冬の通学は毎日顔を真っ赤にして通った。	4-12歳	帯広	官舎	E
	[2]	(関東と北海道の住宅の違い) 横浜に引越し、北海道と同じ3DKの官舎、北海道に比べて壁が薄かったり窓が二十窓じゃなかったり、温かい地域の家づくりが印象的であった。夏をいかに涼しくすごすかに重点が置かれていたように思う。大きな石油ストーブがなく、小さい暖房器具があれば普通に冬をすごせる	12-14歳	神奈川県	官舎	G
3	[3]	冬はとても寒い家、居間にあるドアを開け放しにしているからだと思う。閉めると狭ぐるしいの和其他の部屋が寒くなるという理由から母が開け放しにしている。	4歳	当別町	戸建	D
4	[4]	断熱性能はガラスの引き戸でありあまりよくない。トイレの床暖房を設置 浴室寒く床暖房設置したのは有効だった。	0~3歳	帯広	戸建	B
	[5]	廊下は玄関からの冷機が進入しにくく(つくりになっている)、今が暖かく保たれるので有効である。夏は涼しいので冷房の無い我が家では廊下で遊んだりもした。	3~18歳	帯広	戸建	D
	[6]	FF式ストーブを一台居間に設置している。吹き抜けになっているの問題は無い。	3~18歳	帯広	戸建	B
5	[7]	夜のトイレ。行くのが怖い・・・全部電気をつけていく・・・冬になると玄関からくる冷たい空気を入れさせないため常にドアを閉めなければならず、よりトイレに行くのがつらかった。	0~17歳	苫小牧	マンション	E
6	[8]	冬は隣の小さな公園で大きな雪の滑り台を作って遊んでいた。	3~7歳	栗山町	戸建	F
	[9]	地下にある大きな部屋は、祖父母からもった野菜や果物を冬の間保管しておくのに便利だった。	7~現在	栗山町	戸建	C
8	[10]	冬に大雪になると家の前は大量に雪が積もってしまい、雪かきに大変苦労するし、周りに家がなく、明かりがすくなかったので、孤立感がないわけでもなかった。	9~12歳頃	根室	社宅	A
11	[11]	古い家で、断熱材が少なく、冬は暖房をつけても寒い寒気が入ってきて、とても肌寒い家だった。	0~4歳頃	釧路	戸建	A
	[12]	冬になると雪はあまり降らないが、すぐく冷え込むので、霜を踏んで遊んだり、雪だるまを作ったりして遊んだ。	0~4歳頃	釧路	戸建	F
	[13]	私と妹の部屋(2階)の間には扉があるが、友達が来たとき意外は常にあいている。私の部屋にしかストーブが無いので、扉を開けてしまうと妹の部屋が寒くなってしまうというのも理由だ。	4~現在	釧路	戸建	D
	[14]	妹は一人部屋じゃないと言い張るので、ドアを閉めておくと、いつの間にか扉は開いていて、「寒くて怖い」という言葉が妹の口癖であった。	4歳~現在	釧路	戸建	E
12	[15]	地下室の欠点、冬は寒くて遊んでいられなかった。	0~現在	札幌	戸建	A
15	[16]	アパートの後ろには段差があり、下は空き地が広がっていて冬になるとその段差を利用し滑り台を作って遊んでいた	1~5歳、	小樽	アパート	F
	[17]	アパートの一階部分に住んでいたため、冬に雪が降るとこまめに除雪をしなければ、玄関やまどが埋もれてしまっただろうと話していた。	1~5歳、	小樽	アパート	A
	[18]	冬になるとアパートの裏にかまくらを作りその中で遊んだ	5~10歳	札幌	アパート	F
	[19]	部屋が一番大きなまどの裏の空き地に積もった雪を見てここからなら飛び降りても死なないかなと良く考えていた。	5~10歳	札幌	アパート	E
	[20]	家の斜め向かいの空き地(冬にはここに雪を捨てに行く)がある住宅地	10~現在	札幌	戸建	A
	[21]	冬家を空けて~家に帰ると水道管が凍っていて、水が出なくて大変困ったという出来事である。トイレの便器の中も凍ってしまい、大変だったが、といれはすぐ使えるようになった。水道管の修理には3日ほどかかり・冬季間の長期不在のときは、しっかりと水抜きをしなくてはならないという教訓を教わった。	10~現在	札幌	戸建	A
16	[22]	冬の除雪をする季節になると、近所の人たちはがら空きになっている我が家の北側に雪を積んでいって、親が困り果てていた。	0~10歳	札幌	戸建	A
	[23]	(家を建替えて) 玄関を北側につくり、東側に車庫を作って、除雪近所対策はばっちりになった。	10歳~現在	札幌	戸建	D
	[24]	(家を建替えて) ストーブもパネルヒーターに変わって、部屋中暖かい空気がながれるようになり、家の中でも動き回れるようになった。	10歳~現在	札幌	戸建	B

20	[25]	私たちの家が先に建っていて、後からぎゅうぎゅうに建ててきた家から「あなたの家の屋根の落雪でうちの壁が壊れたからその代金を弁償してくれ」と苦情が来た。父はその家に弁償しましたが、私は正直「自分のことをたなにあげてと思いました。なぜなら、近くに建てられた私の家には日が当たらなくなってしまったからです。本当に悔しいと感じた。	6歳～現在	札幌	戸建	A
21	[26]	当時としては立派な暖房が付いていて暖かかった。	0～3歳	札幌	マンション	B
22	[27]	一階に住んでいたため、冬床が非常に冷え込んでいたのが印象的だった。全体的に寒く、常に暖房の前にいたような気がする。	小学校6年生の1～3月	札幌	アパート	A
22	[28]	各部屋にも暖房が設置されており、全体的に暖かい雰囲気だ	12歳～現在	札幌	マンション	B
24	[29]	弟の部屋～ 全体的には日当たりが悪く冬に寒い	0歳～現在	札幌	戸建	A
25	[30]	家の裏が空き地なので遊び場にはこまらなかった。春は町などを捕まえ、夏は伸びた草に隠れて遊んで、冬は隣家が捨てた雪で山を作って遊んでいた。	96年～現在		戸建	F
26	[31]	この寮は、いろいろなところがもろくなっており、壁は薄く、冬はとても寒かった。いくらストーブをたいてもすぐ寒くなってしまふんだなと身をもって感じた。	高校時代	北見	寮	A
28	[32]	冬はスキーができる公園でよく遊んだ	3～8歳	札幌	アパート	F
	[33]	夏は暑く、冬は寒い 冬は特に石油ストーブにあたりながらコタツに入っていないといられない、朝は冷えるので一回コタツに入ってしまったらもうでるのが嫌になるぐらいだ。	3～8歳	札幌	アパート	A
	[34]	飼っていたお祭りの金魚、小学生のころには30センチメートルになっていたが、その大きな金魚が5匹も入っている水槽が冬になると凍ってしまうのだ。玄関は特に寒く、和式のトイレの水も凍結していたのを覚えている。	3～8歳	札幌	アパート	A
	[35]	夏はとても涼しく冬はアパートに比べたら断然暖かい。ヒーターは各部屋に設置されている。トイレはウォシュレット。凄い住みやすい環境になった。	8歳～今	札幌	マンション	B
	[36]	駅までバスで20分、冬は特に(車が雪で)混んでいるので2時間ぐらいかかったことがある。	8歳～今	札幌	マンション	A
29	[37]	お風呂がとても寒く、冬はとても入れたものではなかったそうだ。なので近くに住んでいた祖父母の家におじゃまして家族3人お風呂を借りていたそうだ。	0～4歳	札幌	アパート	E
32	[38]	旭川という環境のせいか、冬は室内にいても凍えるほどに寒く、逆に夏は窓を開けても蒸し暑い日々が日課となっていた。	高校時代	旭川	寮	A
33	[39]	冬は吹雪いて外で遊ぶことが難しかった	0～4歳	当別	戸建	A
34	[40]	比較的古い家が多く、単なる風でも揺れることが今でも記憶に残っている。冬はとても寒く、札幌のいえのように耐風・耐震までは行き届いていない	0～11歳	函館	戸建	A
35	[41]	冬はとても寒くストーブから離れられなかった	0～5歳	札幌	戸建	A
	[42]	床暖房セントラヒーティング玄関フードも調い冬でも寒いと感じることはなくなった	5歳～現在	札幌	戸建	B
	[43]	家族一緒に寝ることがなくなり、自分の部屋で寝ようになり、前の家では寒くて一緒に寝ていたのだが、はじめはなれることができずに自分の部屋にいたことはなかった、前の家のほうが良かったとなくともあったそうだ。それだけ家族との距離が離れてしまったように感じたのだろう。	5歳～現在	札幌	戸建	E
36	[44]	冬になると家の屋根に雪がたくさん積もり雪かきの手伝いをしていました。玄関のちょうど上の屋根には雪が勢い良く落ちないように斜めになっていて下に積もった雪と一体化していたので、そこをすべりの場に使っていた	12歳まで		戸建	F
	[45]	住んでみると快適で、玄関前もロードヒーティングにしたことによって雪かき作業が前の家とくらべるとずいぶん楽になった。	12歳まで		戸建	B
37	[46]	私が生まれて少したって床暖房がついて玄関と廊下の間に内戸がついたらしい。冬の暖かさが全然とても違ったらしい。	0～中学入学前まで	札幌	戸建	D
39	[47]	冬にはたまねぎ畑が雪を積む場所となっており、大きな雪山になっていたところをそりで滑ったり、雪山の山頂から畑のほうにジャンプしてあとをつけて遊んでいた。また雪が積もることで夏にはいけなかったとおくまで、たまねぎ畑を通して冒険しに行ったのは楽しかった。	0～現在	札幌	戸建	F

40	[48]	デメリットを挙げると、冬になると雪の重みで部屋のドアの開け閉めが困難になることがあり、また家の周りに雪捨て場が無いために雪かきが大変である。	1995年	札幌	戸建	A
	[49]	以前まで空き地だった場所も次々と家が建設されたので、我が家には融雪層を設置して雪を捨てるという解決策を取った。	1995年	札幌	戸建	B
44	[50]	北海道の住宅では主に「寒さ」や雪対策を重視した構造になっているとわかった（山形は雪国ではあるがどちらかというと厚さや湿気を防ぐようなつくりであった）。今のアパートも玄関の扉が二重になっていたり、窓もにじゅうになっていることなどから北海道の住居の特徴が見られる。	19～現在	札幌	アパート	G
45	[51]	自分の部屋から出られるバルコニーで、冬はそこで雪だるまを作ったりしていた。	小学校高学年	札幌	戸建（新築）	F
47	[52]	（北海道のハウスメーカー）Kという北海道の冬に適した家である。屋根の雪が落ちないように、屋根の真ん中がへこんでいたり、今には部屋を暖めるペチカがあるなど、いろいろ工夫されている。冬をメインとした住宅である。	0～現在	札幌	戸建	B
	[53]	母は本当のことをいうと、自分で雪かきをしなくてもよいように、マンションに住みたかったと聞いた。	0～現在	札幌	戸建	A
48	[54]	（以前は官舎）なによりも楽なのが、駐車場がロードヒーティングなので雪かきをしなくても良い	2002年～現在	札幌	マンション	B
49	[55]	前の家はストーブだったため、家全体を暖めてくれるパネル式暖房にととても感動した。	10歳のとき 8ヶ月間	江別	戸建	B
	[56]	冬の寒い中ストーブに背中を向け、寒かったら近づき、暑くなったら少し離れたりして座る場所を節約しながら温まって着替えるのが好きだったため、残念にも感じた。このようなもので生活が便利になったが、それと同時に生活の温かみも薄れたように思う。	10歳のとき 9ヶ月間	江別	戸建	E
51	[57]	冬は暖房をつけるが、家全体は温まらず、暖房をつけている部屋しか暖まらずキッチンの食べ物は凍ってしまい、保存しやすいといっていた。保存にはいいかもしれないが、冬は家の壁自体が薄く、暖房材もあまり入っていないつくりのために暖房機器が傍にないと凍えるように寒かった。	5歳まで	石狩	戸建	A
	[58]	今の家は暖房材も壁に入っており、冬は暖かく、夏は風通しも良い。	5歳～	石狩	戸建	B
52	[59]	岩見沢は豪雪地帯で冬は雪がとてつもなく多く、社宅のみなどでやる毎日の除雪がととても大変だったそうです。また社宅の行き来もあって、みな仲良く交流もあり、親同士だけでなく私たち子どもも楽しかったです。	2～5歳	岩見沢	社宅	E
	[60]	8階建てマンションの3DKで、集合住宅のため暖かく暖房費が安かった。	6～9歳	札幌	マンション	B
	[61]	自分たちの希望に沿って立てられたのでとても住みやすく、毎年除雪作業が大変なのが唯一大変な点	9～現在	札幌	戸建	A
54	[62]	冬は暖かく2階はストーブがいらないくらい快適である。しかし家が暖かすぎて冬は結露がひどい、また交通の便もよくない。	1996年～現在	札幌	戸建	A
	[63]	住んでいる地域は、冬になると雪がたくさん降る豪雪地帯であり、都会ではない静かさの他に、都会ではない大雪に毎年あう。そういうわけで、冬は除雪が欠かせない。融雪溝をつけて雪を投げてでも全然減らない。冬は本当に大変である。	1996年～現在	札幌	戸建	B
	[64]	（以前住んでいた青森と比較して）北海道の住宅は無落雪住宅がととても多いと思った。北海道では、落雪を防ぐために無落雪住宅があるように、家の種類はその気候にあった快適な、より住みやすい家にするために、いろいろと工夫がなされている。				G
55	[65]	冬は寒いので暖炉で火をたいて過ごしている	7歳～現在	札幌	戸建	D
56	[66]	トイレが現代には珍しいポットン便所、正式には汲み取り式便所だったのだ。夏はにおいがキツく、冬になると、においはなくなるがその代わり、お尻につめたい空気があたってとても寒かったのを覚えている。	中学2年生まで	北見	戸建	E
60	[67]	本格的な真冬になると、家中の窓に断熱材代わりのビニールを張る。これは空気の層があり、業務用の特大を買ってきて貼り付ける。フローリングには、新聞紙を敷いてからその上にじゅうたんを敷く。引き戸の隙間には、スポンジを張り隙間風を防ぐ。	0～18歳	北見	戸建	D
	[68]	冬は、各部屋に暖房はついているのだが、天井についているため、暖かい空気が上にしかこもらずに、勉強していると寒く、寝るときは暑かった。	18歳から1年間	札幌	寮	A
61	[69]	冬は毎日のように雪で遊んでいた、今思えば北海道ならではの良い経験だったと思う。	0歳～高校入学	枝幸町	戸建	F

冬における住生活の「不便さ」「寒さ」が、つらく苦しいものであると感じていることをうかがわせる記述が多く見られた。また、分類 A の回答者の体験時の年齢をみると 10 歳以下の場合が多く（表 2）、北海道の住まいは 1980 年～1990 年代前半は現代の北方型住宅のような寒さ対策に優れた住宅はほとんど無い時期であり、このような社会的背景が体験記述として現れたものと思われる。

B： 技術革新による快適性の確保

技術の発展や利用によって、寒さ雪を克服して、住生活の快適性を得ていた様子も多く見受けられた（表 1）。具体的には暖房機材、地元業者、集合住宅、融雪溝のような機械・技術の面の発達に関する記述が多くあった。以下に代表的なものを記述する。

暖房機材：トイレに床暖房を設置、寒いと感じることはなくなった（表 2・[4]、[42]）、部屋でも動き回れるようになった、全体的に暖かい（表 2・[24]、[28]）、全室暖房し住みやすい環境になった（表 2 [35]）

北海道のハウスメーカー：地元のハウスメーカーによる設計なので、いろいろ工夫され冬をメインとして考え対応策を講じている住宅になった（表 2・[52]）。

集合住宅：暖かく、暖房費が安い（表 2・[60]）

融雪溝・ロードヒーティング：雪捨て場がなくなり、融雪溝を設置する解決策をとった、雪かきをしなくてもよい、雪を投げてでも全然減らない（表 2・[49]、[54]、[63]）

回答者が 10 歳を過ぎてから体験した記述が比較的多い。北方型住宅が普及し始めていた時期であるのと、また、ライフサイクルという視点から見た場合、親世代の所得が上がる時期でもあり、質のいい住まいに住み替えることができる時期ともなり、マンションや新築の戸建を購入し、暖かい住まいを獲得していったという背景もあると思われる。

2-2 冬の住まい方の工夫

C： 寒さを利用する

住まい手の成長という側面を考えた場合、寒さをネガティブなものとしてばかり捉えずに、どのように利用していくかを考えることは重要なことと思われるが、今回の調査における体験記述からは、寒さを利用するとした回答が 1 ケースしか見られなかった。

「地下にある大きな部屋に野菜や果物を冬の間保管しておく」（表 2・[9]）という回答の中から、住まいの間取りや構造を工夫し活用しつつ、冬の寒さを上手に住生活の中に組み込んでいる様子がうかがえた。寒さを利用した住まい手の工夫による貴重な実践であろう。

D： 寒さ対策

冬の寒さを克服する手段を用いて、住まい手の暮らしの中の工夫によって快適な空間へと変えているという記述が見られた。以下に代表的なものを記す。

他の部屋を暖めるための開け放し：閉めると狭苦しく、他の部屋が寒いので部屋の戸を開けたままにする（表 2・[3]）

間取りで工夫： 冷気の進入しにくい間取り（表 2・[5]）、玄関と廊下の間に内戸をつける（表 2・[46]）

暖かさの演出： 暖炉で火を焚いて過ごし温かさを得ている（表 2・[65]）

新聞紙やビニールを貼る： 断熱材代わり（表 2・[67]）

寒さの克服は、住まい自身の日常的な暮らし方の工夫、及び住宅を建てる時の間取りの選定、暖房断熱のために用いる素材等によってある程度は解消することができる。体験記述からは住まい手自身が実践力や創造力をもっていること、間取りを読み取る力が備わっていることがうかがえた。

2-3 子どもの成長を促す雪、寒さ、人

E： 原風景、感受性を刺激する体験

幼い子ども時代には自然や人との関わりを通して感性を育むことが重要だと言われる。北海道では雪や寒さという気候を生かした遊びの創造や自然環境との関わりのお機会が持てる。体験記述を見るならば次の三つに大きく分けることができた。以下に代表的なものを記述する。

皮膚感覚：（冬の通学は）顔を真っ赤にして、（寒いのでストーブの傍に座って）熱いと離れ寒いくっつき、お尻へのつめたい空気（表 2・[1]、[56]、[66]）等の身体感覚の記憶

怖さの記憶：夜のトイレの寒さ怖さ、夜は怖くて寒いのでドアを開けておく（表 2 [7]、[14]）

家族、地域との関係：（お風呂を家族で借りに行ったときの）寒さと家族のぬくもり、（自分の部屋ができ）一人で寝るようになって感じた寒さと寂しさ、 隣近所で除雪したときの楽しさ（表 2・[37]、[43]、[59]）

体験記述からは、住まい手が子ども時代に寒さや雪を媒介にして、家族や自然や地域の人との関係を生き生きと築いている様子がみられた。

F： 子どもの遊び場

雪という自然環境を活用することで様々な地域ならではの遊びと、雪の特質を利用した遊び、雪が新たな空間をつくりだして、子ども時代の冒険遊びを可能にしている様子が見られた。以下に代表的なものを記述する。

雪国の遊び： 滑り台、雪だるま、かまくら、スキー（表 2- [8]、 [18]）

雪の特質の利用： 霜を踏む、雪の段差（表 2- [12]、 [16]）

冬ゆえの冒険： たまねぎ畑を使って遠くまでいける（表 2- [47]）

他： 冬は毎日のように雪で遊んでいた（表 2- [69]）

雪、寒さが子どもにとっては、大切な成長の糧になっていた様子が見えてきた。雪という存在が、冬になると遊び道具や遊び場になり、夏場とは違った新たな空間を作り出し、環境学習の場としての力を引き出しているのではないかとと思われる。

2-4 北海道の地域性への見直し

G： 本州との違い

回答者のうち、本州で暮らしたことがある学生が数名見られた。北海道の住まいが雪、寒さへの対策の面で独自の住形態であることに気づくコメントが見られた。住まい手自身が比較検討することで良さが見えてくるものである。（表 2- [2]、 [50]、 [64]）

3. 今後の課題

北海道の住宅は、近年の著しい技術革新の中で冬の暮らしをより快適なものへと変容させていた。しかし、技術により克服できる部分はあっても、やはり雪や冬はつらいもの、大変なものという気持ちが住まい手にはあることもわかった。技術における限界の部分を、住まい手自身の暮らしの工夫によって解消し、暮らしの質を高めていく方向性を作っていくことが今後必要なのだと考える。今回考察した体験記述の中には、寒さや雪を利用することによる豊かさへの取り組みへの示唆があった。一つは住まい手自身の雪や寒さ対策の工夫、寒さを利用する取り組みがあった。また二つ目には、子どもや家族、自然との関係を深めていく媒介としての雪や寒さの価値が見出された。

住まい手の成長を促し北海道の住居をさらに豊かに発展させていくためには、住まい手自身が雪や寒さに対する価値を転換し、利用方法を工夫し発見していく創造力を育てることが必要だと考える。そのために住教育を促進していくことと、これまで住まい手が行ってきた暮らしの工夫の実践を集めて、住まい手どうしが交換することができるような機会を設けていくことが大切ではないかと考える。

今後は、住まいの体験記述の研究方法としての可能性を検討することと、北海道の住生活の方向性をさらに追及していきたい。

[注・参考文献]

- 1) 北方型住宅とは、産・学・官が一体となって推進してきた住宅形態で、北の住まいの新しいスタンダードとして、「長寿命」「安心・健康」「環境との共生」「地域らしさ」というこれからの住まいに求められる4つの基本的な性能を完備した住まいとされている。この基本的な性能を実現できる具体的な基準（ルール）が定められており、建築するための支援制度等もある。
- 2) 参考図書：「住まいを語る－体験記述による日本住居現代史－」鈴木成文、建築資料研究社、2002